

途中でそれ等の要求に応じて印刷して行きます。plotしたものが直ちに印刷にかけられるのです。この様にしてplotされた地上天気図を航空会社の技術者は約束の時間に受取って解析を行います。その外 500MB Map, 航空路に沿う地点の断熱図, 必要に応じて 700MB, 850 MB Map を作製します。すべての基礎的解析図が出来上ってから、乗員が必要とする断面図の作製にとりかかります。以上の様な仕事を実施するのに原則的には一人で行いますが、次から次へ飛行機の発着の繁い場合には、もう一人が援助する構成になっています。援助者は実はこの様な shift に入っている人ではなくて全技術者の指導の立場にある人です。日本流に申せば技師長とでもいべき人でしょう。この人は随時出勤して shift の運行や庶務的な事をも処理したりします。

### 航空路の天気精通する

気象技術者は機会のある時は、よく同乗して会社の空路に親しみ、その高所の現象に精通する様心がけております。或時、突如発生した Tornado に、興味ある気象技術者は直ちに movie を抱えて現場へ飛行し貴重な記録映画を撮って来ました。後日それを分析し、乗員に公開し且つ学界へも発表した例もあります。

### 業務としての気象

以上簡単なが航空会社の気象課の内容につきまして紹介しましたが、なお会社の運航の側から気象業務を覗いてみたいと思います。

航空, dispatch 業務, 気象業務の三者は同等の作業

として運航が成立していることはアメリカの航空会社の明示しているところであります。そしてこの三者は業務遂行に当っては、相互の仕事を明確に理解する組織の下に、常に協調的な態度で臨んでおります。勤務中の気象技術者は定められた方法、手続によって、定められた地域に亘って生ずる現象を決定するため解析図を作製します。そして将来の気象の変化及び大勢の予報を準備します。更にこれらを基礎にして各飛行前乗員に示すための気象図を準備します。又一方勤務中の flight dispatcher と現状及び予報について検討します。又気象課内の運営はどうかというに、気象首席技術者は運航担当最高責任者の支配下にあつて、気象業務の管理を行います。そして気象課の絶えざる進歩に努めることが第一で、そのためには新しい技術的方法や実施については気象員を指導します。又進歩上達するように shift を組み、作業の基準を設けます。

### 気象学会

ここに申し上げるのはいわゆる大学関係の学術発表会とは別の学会であります。会社、W. B. 関係のものが月に一、二回集って発表会をやるものです。会長にはやはり大学教授が就き、司会もやります。例えば Los Angeles では前述の Neiburger が会長でその地域の者が集り、講演者は一回一人で研究発表を行います。討論は重に大学側の研究障が活潑にやります。

その他航空会社の気象技術者の研究で航空界に貢献した者に対しては航空局から毎年 500ドルが贈られることになっています。(日航気象室)

### 書評 気候変動論 荒川秀俊著 気象学講座第10巻

定価230円 地人書館 1955年

由来気象変化の問題は一般人にとっても大きな興味と関心がもたれていると同時に将来の気象を予測する側からも我々の実生活にとってきわめて重要な関係をもっていることは言うまでもない。ただ問題が今の処かなり漠然としているにもかかわらず、非常に花やかな存在だけに気の弱い者にとってはとなく手が出し難く、特に地質時代や地質時代の古気象学は未だに“最も危険なる科学”の域を脱せず、相当の勇氣と大胆さを必要とする。ここに多才の著者は最近において歴史時代の気候変動の方面に縦横の論陣を張られ、既に多くの成果を挙げられている。本書は現在地人書館から刊行中の気象学講座の第1回分として出版されたもので100頁足らずの小冊ではあるが著

者のこれまでの諸研究を骨子としてまとめられた、主として日本を対象とした気象変化に関する好著である。全巻5篇(1. 気候の温暖化, 2. 北日本の気候変動, 3. 太陽のウォルフ黒点数, 4. 天明の飢饉, 天保の飢饉, 慶応・明治初年の飢饉, 5. 若干の気候変化資料)より成り、1. では現在までの諸家の考察を気候の温暖化を中心として簡単に概観し、2. は気候の変動が南日本に比べて北日本の方が遥かに大きいとして主として著者自身の研究を紹介し、3. は太陽黒点とこれに関連したケッペンその他の研究、4. は幕末から明治にかけての飢饉を古記録によって調べ、太陽黒点と関係づけて説明したもの、5. は諸資料である。

要するに本書は著者自身の研究を中心とした気候変動論で多くの紙上に分散している成果を一括して眺め

るには非常に便利である。しかし本書はどこまでも講座の中の一冊であるから、むしろもっと広い視野から全般にわたる諸説の紹介や論評を行われた方が読者の要望に副うものではなかったかとも思われる。又著者は前々から気候変動の見地から日本の歴史について新しい解釈を明らかにされており、たとえば平家の没落や徳川幕府の崩壊などを気候異変によって説明され、過ぎし日のハンチントンをしるばせるものがあるが、本書ではほとんどこれらに触れられていないのも惜しい気がする。しかし何分この程度の紙数では、あるいはやむをえないことであり、仮に筆者に執筆を課せられたとしても似たような形になったかも知れない。

いずれにしてもこの方面に好著を加えたことは斯学の進歩に一歩を進めたものと言えよう。

(福井英一郎)